

正宗白鳥

「没理想」論争

「没理想」 論争

逍遙鷗外の「没理想」論争は、明治文学史上、文壇に刺戟を与えた最初の意義ある論争であつた。小説の方面で紅葉露伴が並び称せられたように、評論の方面で逍遙鷗外が並び立つようになったのは、この論争のためであつた。当時新進の青年文士であつた彼等の鬪争は、目ざましかつた筈だ。そして、当時の、少数の、文学好きの青年は、何が何やら分らぬなりに、興味をもつて彼等の論争を見ていたのであろう。

私などは、その頃はまだ十三、四歳の少年であって、全然論争の意味は分らず、後日になって回顧的に読んで、重大な意味がそこに潜んでいそうに感じながらも、はっきりした事は分らなかつた。今日になって批判的に読んで見ると、彼等自身もよく分らないで、ふとした思いつきからあんな議論をしたのに過ぎなかつたと推察されるが、しかし、あの時分の片々たる凡庸な文学論とはちがつて、新味ある啓蒙的論争であつたと云えないこともない。

森鷗外は、自分を中心とし、数人の同好者と共に、東

西古今の詩歌数十篇を翻訳して、「国民之友」に寄稿し、相当の原稿料を得たので、それを基金として、「文学評論しがらみ草紙」を発売することとした。明治二十二年十月にその第一号が出たのだ。文学青年の道楽雑誌見たいなものだが、紅葉一派の硯友社連中の「我楽多文庫」のような、江戸の戯作者流に、何でも洒落のめして喜ぶような道楽雑誌ではなくって、そこには、文学でも美術でも演劇でも、新時代の眼識で堂々と論ぜられていたのであった。殊に鷗外は、ドイツで学んだ世界的新知識を振り廻して、幼稚な文壇を斬りまくったのであった。向

う所敵無しで、鷗外自身さぞいいきもちであったであろうと推察される。鷗外は創作よりも評論に興味を持っていたらしく、その新刊の雑誌にも、文学評論と頭に銘打ったのであった。

坪内逍遙は、早稲田の学校に、新たに文学部を創設してから間もなく、明治二十四年十月に、雑誌「早稲田文学」を刊行することにした。自費で、損を覚悟ではじめたのであろう。文学部で、啓蒙的芸術教育が施されていたが、この新雑誌も、それと呼応して、啓蒙的態度を採り、幼稚な当時の文壇を教育しようとして心掛けたものらし

い。それ故、「しがらみ草紙」の、異色ある近代西洋文学の翻訳、元気のいい論争、六ヶしい西洋文学論の紹介などを、自己の好みのままにやっていたのは、編輯態度がちがって、「莊子」の講義とか、万葉の講義とか、近松の浄瑠璃の註釈とか、中国の戯曲の説明とかが、連載されていた。そして、逍遙自身は、シェークスピアの脚本「マクベス」の註釈を連載することにした。その評釈の態度を自から説明して、「評釈には、只有りのままに字義語格等を評釈して修辭上に及ぶのと、作者の本意若くは作に見えたる理想を發揮して批判評論するのと、

二つの方法があるが、自分は第一の方法を採る。それはシエークスピアは万般の理想を容れて余りある大詩人であり、見るものによつて（すなわち読者でも、見物人でも、その人次第で）その相すがたを異にし、その味わいを異にする自然そのもの、造化そのものの如きおもむきがあり、言葉を換えて云うと、シエークスピアの偉大なる所以は、所謂、（理想の見えざるところ）即ちその（没理想）であるところにある。であるから、この（没理想の作）を理想をもって評釈することは不要であると云うべく、従つて自分はこのマクベスの評釈に於ては、主とし

て打見たる儘の趣きを描写することを力めようとする。若しそれ全体の解釈は、読者みずから之れをなせよ、理想、日本大ならん人は、日本国をマクベスの脚本中に見出さん。理想、宇宙大ならん人は、宇宙をマクベスの中に見出さん。理想、万古にわたらんには、イターニチーをマクベスの中に見出さん。没理想の詩の無限の興味は、実に其度量の大洋の如き所にあるなり」と云っている。

颯爽たる意気である。あの頃、すなわち、明治二十年代のはじめに、これだけの事を云ったのは凡庸でないと云っていい。少年時代に、名古屋の有名な貸本屋「大惣」

の多量の蔵書により、徳川末期の戯作者本を読破した逍遙は、上京後は、当時の日本で手にし得られた僅少の英国の小説や、文学論によつて刺戟され、自分の文学観を朧ろげながら樹立した。勸善懲悪主義の馬琴を排斥した「小説神髓」論を發表したのはその結果であつたが、「没理想説」の主張も、僅少な西洋の小説や評論に接触しているうちに、彼の傑れた直覚によつてふと思付いたのであろう。彼は、新雑誌「早稲田文学」には、「時文評論」という一欄を設けて、文壇さまざまな事実の報道をして、それについての公平な評価を施そうとした。早稲田の「記

実主義」が文壇に有名になったのである。「記実」と云い、「打見たるままの趣きを描写する」と云い、後年の自然主義の態度と相通ずるところがあるので、逍遙の直感には新味があつたと云つていい。ちよつとした思いつきであつたにしろ、その所説は馬鹿にならぬのである。

ところで、論争の相手欲しやと、あたりを睨み廻していた鷗外は、この「没理想論」を読んで、これは論争の種になりそうだと興味を覚えたらしかった。手玉に取るにも取り甲斐があると思つたらしかつた。そして、鷗外は先ず理想の価値を説き、この世界はひとり実であるば

かりでなく、また想にみちみちたものである。よく理性界を見、無意識界を見るとき、そこには先天の理想がある。例えば孔雀の羽のいろいろは、その翰ねから受ける養いが同じなのに、色彩の変化は一本ごとに殊ことなつて居り、そして、その相殊なる色彩が合して、渾身の紋理をなすのが、先、天、の、理、想、の、然、ら、し、め、る、と、こ、ろ、で、あ、る、と、云、う、が、如、き、で、あ、る、と、云、っ、て、い、る。

逍遙の所説は常識的であり、文章は美文調であるが、鷗外のは哲学的であり、文章も色艶をつけない理論一てん張りの調子である。

逍遙曰く、「祇園精舎の鐘の声、浮屠氏は聞きて寂滅
 為樂の響なりといえども、待宵まつよいには情人が何と聞くらん。
 沙羅双樹の花の色、厭世家の目には諸行無常の形とも見
 ゆらんが、愁いを知らぬ乙女は、如何さまに眺むらん。
 要するに、造化の本意は人未だ之れを得知らず、唯己に
 愁いの心ありて私の哀れを知り、已に其の心楽しくして
 春の花鳥を樂しと見るのみ。造花の本体は無心たるべし。
 さてシェークスピアの傑作は、頗る此の造花に似たり」
 云々。

これに対して、鷗外曰わく「破がねならぬ祇園精舎の

鐘を聞くものは、待人恋いしとおもひ、寂滅為樂とも感ずべけれど、其声の美に感ずるは一なり、沙羅双樹の花の色を見る者は諸行無常とも觀じ、また只管にめでたしとも眺むれど、其色の美なりとは、耳ありて能く聞くために感ずるにあらず、目ありて能く視るために感ずるにあらず。先天の理想はこの時暗中より躍りいでて、此声美なり、この色美なりと叫ぶなり、これ感納性の上の理想にあらずや」

先天の理想などを、事々しく持出して論じまくつて、「どうだ、こういう深遠な哲理は汝等はまだ知るま

い」と嘯いている新帰朝の面魂が目に見えるようである。今読んでも、先天の理想を此処へ持出したのは鬼面人を脅かす趣きがある。逍遙は弁解して、「没理想」は「無理想」の意味ではなく、むしろ、あらゆる理想を包含して余りあるの意味でありとし、シェークスピアの戯曲も造化の如く、あらゆる理想を包含して綽々として余裕あるように見ているのであると云い、その言訳がよく分るとともに、常識的であり、鷗外のは少し分りにくいだけに、意味が深そうで、えらそうに聞えるのである。面白い事には、この傾向は今日の文壇にまで続いているので、

評論も哲学的難解用語を使役したりすると、重々しく見られ、同じ事でも分り易く云うと浅薄に見られるのである。

音楽家は意識して声を調べ、画家は意識して色を施し、名曲を造り名画を作るのであるが、すべての芸術家は意識的に製作するばかりではなく、美しい強い夢の裡にその調を得たと、モツアルトが云っているように、音楽家でも画工でも詩人でもそういう経験をもするのである。これが神来すなわちインスピレーションで、真の美術家の製作は無意識の辺より来る。これ制作性の上の理想に

あらずやと、鷗外は云い、「作家に貴ばるべき理想は、抽象から生じ、模型に従ってあらわるる類想でなくて、結象して生じ、無意識の辺より躍り出ずる個想であり、小天地想であり、従ってシェークスピアの如き大詩人の貴ばるるのは、逍遙の云う如く没理想のためではなく、その理想の個想であるためであり、小天地想であるためである。シェークスピアが造化そのもの、自然そのものの如く思われるのは、太虚の無意識中から意識界に取り継がれずして生れた造化と、同じ無意識中から、作者としてシェークスピアの意識界を経て生れた詩と似ている

からである」と説いてゐる。

あの頃の文学青年も、こういう哲学流の感想を心を籠めてよく読むと、臃ろ気にその意味が分つて、何となく有難く覚えたであらうが、逍遙のように分り易く云つたつて、その意味は通じるのである。「無意識の辺から躍り出ずる個想」なんか、それを筆にしたあの頃の鷗外自身、どれほどに身に染みて感じていたことか。彼はハルトマンの「無意識哲学」の感化から、そういう事を空想していたのであらう。後年の鷗外は、それについて云つている。感想小説「妄想」には独逸留学中の青年時代が

回顧されているが、そのなかに、或種の煩悶の慰藉を求め、夜の明けのを待ち兼ねて、ハルトマンの無意識哲学を買いに行った。これが哲学というものを覗いて見た初で、なぜハルトマンにしたかというところ、その頃十九世紀は鉄道とハルトマンの哲学とを齎したと云った位、最新の大系統として賛否の声が喧しかったからである」と云っている。鷗外は最初に接触したこの哲学に感動して帰朝したのだから、何かにつけてハルトマンに学んだものを持出すようになったのであった。

没理想論争の時にも、このハルトマン哲学の影が飛出したのだ。このドイツの新哲学などはまだ英訳はされていなかったもので、研究心の強い逍遙その哲学の一端をも窺う事が出来なかったのだ。逍遙としても齒痒かった訳だ。あの頃の鷗外は、鳥無き里の蝙蝠見たいなもので、過分に身を振舞い得られたのであった。「妄想」のなかであの頃を回顧し、「一頃芸術の批評に口を出して、ハルトマンの美学を根拠にして論じていると、或後進の英雄が云った。（ハルトマンの美学はハルトマンの無意識哲学から出ている。あの美学を根拠にして論ずるには、

先ず無意識哲学を信仰してはならない」と云った。なる程ハルトマンは自家の美学を自家の世界観に結び付けてはいたが、姑くその連鎖を断ってしまったとして見ても、彼の美学は当時最も完備したものであつて、而も創見に富んでいた。自分は美学の上で、矢張り一時の権威者として、ハルトマンに脱帽したに過ぎないのである」と云っている。無意識哲学の淵源はシヨオペンハウエルで、「世界の出来たのは失錯である。無の安さが誤まって攪乱されたに過ぎない」と云うような厭世観から、尾を曳いて、無意識哲学になるので、鷗外は「没理

想」を非難しているうちにも、異国で若い心に浸染した無意識哲学が思出され、単純な、底の浅い逍遙式没理想説なんか、浅薄幼稚に思われ、それで、笠にかかって論破する気になったのであろう。

二葉亭四迷は、逍遙の「小説神髓」を読んで、いろいろ疑問を起し、逍遙を訪問して教えを受けんとしたのだが、二葉亭の方が、ロシアの有名な評論家ベリンスキーの理論などを持出して詰め寄るので、却って逍遙の方がたじたじになったくらいで、逍遙は二葉亭によって大いに啓発されるところがあったと云われる。二葉亭のベリ

ンスキー、鷗外のハルトマンと云ったような、有力な守り本尊は逍遙にはなかった。それで彼は、十八世紀の英文学などを手頼りに、自分独自の思付きの文学論を振り廻しているような有様であったのだ。「没理想」論争は可成り長く続き、飽くまで相手を迫究せんとする鷗外の、仮借なき酷しい太刀風に、逍遙も抵抗しがたくなり、くどくからんで来る野暮つたい議論を戯作者張りで洒落のめすような態度を採るようになった。丹波与作を持出して、「与作覚えば照る日も曇る。関の小万の涙の雨か」なんか、「没理想」説に何の関係もない小唄を唄わせた

り、講釈師が張り扇を叩いて軍談をやるような態度で論を進めたりした。さすがの鷗外も苦笑したことであろう。この論争は当時の文壇の問題になったにちがいがなかったし、青年文士は読んでその意味を捉えようと勤めたであろうが、直接に当時の文学に影響することはなかったのだ。空論として読まれていたようなものなのだ。「小説神髓」の小説論は、一通りよく分って、これから小説を書かんとする新作家の心得になったのだが、没理想説なんか、直接小説作法として役に立つのではなかった。ただ、早稲田の「記実」千駄木の「談理」と、おおまかに

区別されて、議論の題目にはなっていた。

「物に逢いて美を感じ、物を造りて美をなす。是れ評者と作者との境界なり、美術の境界なり文学の境界なり。美はこれを拆さいて繁かさき意義となし、これを統べて深ふかき考思となすべし。羅馬なるサントペエトルを觀て、ミケランジェロが作りし雛形の美に驚くは、建築を視る眼あるもの皆能くするところなるべし。これを美なりと記さば、記実者の役済むべけれど、談理者はそれにて足れりとすべからず。かのフランス人某が如く、高等静論の算法によりて古人が不用意にして静性の極処に至れるを看破し

てこそ、その美なる所以を知るべきなれ。ライプニッツが楽調の美を知るを無意識中の算術といいしもおなじ談理の境なり。若し美の義こころを碎いて理に入ることあらずば、審美学は起らざるべし」と鷗外は説いている。

しかし、早稲田の「記実」と云つても、建築の美を見て、ただ美なりと記すだけで足りとするのではあるまい。美たる所以を、読者が納得するように記述しようと思すのであろう。美の理を記すのと、美の理を談ずるのと、どちらが芸術研究者の態度として傑れているであろうか。

私は思う。何としても「記実」はいいことである。小理論に耽るよりもいい。自然の有りのままを描かんとは、田山花袋などの熱説したところで、自然主義の本領とされた。「早稲田文学」は「記実」を志し、「談理」に耽らざるべしと、編輯態度を明かにしていたが、この態度を小説の上につつすと、現実の客観的描写を是とすることとなるのである。島村抱月が自然主義の仲間に入って、この流派の真意義の闡明に努力されたのは、逍遙が早く直覚しただけで放任した「没理想」精神を、無意識に受嗣いで、発展させ追究させたようなものである。しかし、

凡庸な記実には終始しては文学価値は乏しい。「早稲田の記実には飽足らなかつた」と、田山花袋でさえ云つていた。皮相な写実、凡庸な客観文学は詰らないに極つてゐる。

ところで、「没理想」や「記実」を唱道した逍遙は、抱月などの強調した後年の自然主義には好意を寄せていなかつたらしい。そして彼自身は、没理想的でない、有るがままの描写ではない戯曲、その他の作品を製作し発表した。また鷗外の方では、晩年には、自然主義にかぶれたような、ただの記実に過ぎないような、瑣末な小説

を幾つも書いた。「先天の理想が無意識に躍り出す」ような作品は文壇に送り出なかった。却って、「澁江抽斎」や「北條霞亭」などのような、純記実的の、そして気品の添った作品が出現したのだから不思議だ。逍遙の脚本なんかよりも、むしろ、鷗外の晩年の史伝風の小説の方が、没理想的であるから面白い。青年時代の勢いに乗った議論は議論として、鷗外の生れながらの素質は、ハルトマンの厭世哲学に共鳴しそうであるとは思われない。これは余談であるが、近年は、鷗外は過去の文壇の偶像の如く尊重され、逍遙はいちじるしく軽視されている。

時代に連れてそれほどの懸隔が出来て来たのか。以前は必しもそうでなかった。花袋獨歩藤村などはいずれも逍遙を軽視して、鷗外や二葉亭を重んじているらしかったが、一般の文壇では、逍遙鷗外は並び将せられていたのだ。「新曲浦島」と、「両浦嶋」とは殆んど同じ時代に、楽劇用、演劇用として出現したのだが、その優劣は判じ難かった。世間の評判も概して同じようであった。私などは、晩年に全精力を注いだ逍遙の翻訳沙翁全集よりも、一生を通じてやすやすと翻訳したらしい鷗外のさまざまな西洋文学翻訳によって益を得たと云っていいのだが、

しかし、学生時代に早稲田の講堂で、坪内逍遙生から、断片的に聞いた和洋の文学談、演劇観によつて、私自身の知能の啓発されたことを私はおりおりに触れて追懐している。新しい思想の抱月よりも、頭の古い逍遙の方が、直感がすぐれていて、その不用意の話にも含蓄があつたと、私には追懐されるのである。逍遙は「和漢洋を打つて一丸となす」と説いていたことがあつたが、鷗外は「自分は一切の折衷主義に同情を有せない」と云つている。個性発揮の徹底的態度を好んでいたのであろうが、彼の作品は、強烈な個性発揮は見られないのである。昔、岩

野泡鳴が鷗外逍遙漱石などを二流作家であると放言したことは、いつまでも私の頭に留っているが、これ等過去の文豪には、人生観察の上に、人生行路の上に妥協性があり、折衷主義態度があるように私には思われるのである。それがあればこそ、その時代に於て、多数者に奉られ、多数者に尊敬されるのであろうか。

それから、これも余談であるが、「没理想」論争の起った以前に、鷗外の論争の相手になった批評家に、石橋忍月があつた。明治二十年代の初期、彼が大学在学中に数年間、雑誌や新聞で毎月批評の筆を揮っていた。二葉

亭鷗外、紅葉露伴などが、はじめて創作を発表した、明治の新文学発生時代に、忍月は小説月評のようなことをやっていたのだが、その批評は今読んでも、肯綮に当たっていて、古くさい感じがしない。彼は新日本文壇に於ける小説月評家の元祖見たいなものであった。ドイツ文学に親しんでいて、レッシングやヘルデルなどの評論によって知恵をつけられていたようだ。その後の、二十年代の後期、三十年代の批評家よりも文学の理解に富んでいたようである。鷗外と云い忍月と云い、あの時代の文学批評家はドイツ系統であったのだ。日本の文学批評界で

フランス文学者が跋扈しだしたのは近年のことである。
これは偶然の現象であるか。時代の推移が自然に然らし
めたのであるか。

日本文学電子図書館

「没理想」論争

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「白鳥全集」第7巻、新潮社

昭和42年5月30日 発行

昭和51年8月30日 セット版

日本文学電子図書館